

日中接触場面の雑談における母語話者と非母語話者による「バランスをとるための笑い」の分析：『BTSJ日本語自然会話コーパス（2020年版）』を用いて

著者	宇佐美 まゆみ, 張 未未
雑誌名	言語資源活用ワークショップ発表論文集
巻	5
ページ	301-314
発行年	2020
URL	http://doi.org/10.15084/00003170

日中接触場面の雑談における母語話者と非母語話者による
「バランスをとるための笑い」の分析
— 『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020 年版)』 を用いて —

宇佐美 まゆみ (国立国語研究所) †

張 未未 (早稲田大学大学院教育学研究科) ††

**"Laughter to Balance" in Causal Conversations in Japanese-Chinese
Contact Situations:
By Using "BTSJ Japanese Natural Conversation Corpus with
Transcripts and Recordings (2020)"**

Mayumi Usami (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

Weiwei Zhang (Waseda University Graduate School of Education)

要旨

日常生活に頻繁に生じる笑いは、ポライトネスにもかかわり、対人コミュニケーション上、極めて重要である。本研究では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020 年版)』を用いて、日中接触場面の初対面・友人同士の雑談における「バランスをとるための笑い」(早川, 2000a)を、母語話者と非母語話者で比較した。その結果、①「バランスをとるための笑い」は、初対面会話では、母語話者のほうが多く、友人同士の会話では、非母語話者のほうが多い。②母語話者は、友人との会話より初対面会話において、「バランスをとるための笑い」が多いが、非母語話者は、友人との会話のほうに多い。③母語話者は、初対面会話において「自分の領域に属する内容」に言及する際、笑いが共起することが多いが、非母語話者は、初対面・友人同士いずれの場面においても、「相手領域に踏み込む際」に「バランスをとるための笑い」を共起させてポジティブ・ポライトネスを表していることなどが明らかになった。

1. はじめに

「笑い」は、社会生活を円滑に営む上で必要不可欠なパラ言語の一種である。社会的に組織された笑いは、話し手と聞き手双方と一緒に協働して紡いでいく会話の共創に貢献する(難波, 2017)。また、異文化間コミュニケーションにおいては、摩擦を防ぐためのストラテジーとしても用いられることが予想される。本研究では、このような観点から、『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020 年版)』の中から、接触場面における初対面会話と友人同士の会話を選定し、それぞれの会話における母語話者と非母語話者の笑いの頻度や機能を比較した。また、その結果が、日本語教育にいかに関与するかを論じる。

2. 先行研究

日本語における笑いに関する研究には、笑いの機能の分類をし、その分類に基づいて実証的研究を行った一連の研究がある(早川 1995, 1997, 2000a, 2000b, 2001)。早川 (2001)

† usamima@ninja.ac.jp

†† tyoumimi@fuji.waseda.jp

は、親疎・上下関係によってジャンル化される会話の中で、「仲間づくりの笑い」は親しい間柄（親親+親）、雑談、同年齢の者に対して多出するが、「バランスをとるための笑い」¹は普通の間柄、ミーティング、自分より年上の者に対して多出するとした。文（2002）は、初対面会話における日本語母語話者による配慮としての笑いは、FTA を軽減するストラテジーとして機能しているとした。また、大津（2014）は、笑いは、親しい友人同士の雑談における対立行動において、それが「遊び」であることを相手に伝える機能を果たしているとし、ポジティブ・ポライトネスのストラテジーになっているとした。そのほか、笑いを取り上げた研究には、インタビューを対象とした池田（2003）やロールプレイを対象とした三宅（2011）などがある。

一方、異文化間コミュニケーションにおける笑いに関する研究は、村田・堀（2007）、笹川（2008）、宇佐美・張（2020）などがある。日英・日中接触場面における英語会話に見られる笑いに着目した村田・堀（2007）では、日本語・中国語母語話者は、英語母語話者と異なり、特に面白いとは思えない通常の陳述のあとに笑いを添えたり、それに対して笑いで応える場合があることなどを報告している。笹川（2008）は、日米・日中初対面の日本語会話における笑いを観察し、自己のフェイスを保持する「品行」に関わる笑い相手のフェイスを脅かさないことを示す「回避儀礼」に関わる笑いは日本語・英語・中国語母語話者に共通に見られたが、相手のフェイスを評価する「呈示儀礼」に関わる笑いのうち、「からかい」「感嘆」「祝福」「感謝」の笑いは日本語母語話者だけに見られ、英語・中国語母語話者には観察されなかったとしている。ただ、量的な側面には触れられていない。宇佐美・張（2020）では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス（2018年版）』の中の「コア会話」²155会話を対象に、まず、グローバルな観点から、母語場面、接触場面別に、初対面の会話と友人同士の会話における笑いの使用傾向を明らかにした。その結果、接触場面では、非母語話者のほうが母語話者よりも笑いが多く、母語話者、非母語話者ともに、笑いのタイプは、「仲間づくりの笑い」、「バランスをとるための笑い」、「覆い隠すための笑い」の順に多かったことなどが報告されている。異文化間コミュニケーションを扱った研究には、日本語母語話者と中国語母語話者の接触場面における日本語会話を扱ったものはまだ少ない。また、宇佐美・張（2020）では、大量のデータの全体的傾向を示しているが、その中の場面や相手、話者の違う会話において、笑いの機能が異なるのか否かなどの質的分析までは行っていない。

そこで、本研究では、宇佐美・張（2020）の定量的分析による全体的傾向を踏まえた上で、人間関係の潤滑油であり、文化によって違いが出やすいと予想される「バランスをとるための笑い」に焦点を当てて、母語話者と非母語話者による笑いの現れ方や機能に違いがあるかどうか等、その特徴について質的分析も交えて分析する。

¹ 早川氏は、「バランスをとるための笑い」を次のように説明している。自己の領域にある恥ずかしいこと、プライバシーに属することを開陳する際に笑うことがある。また自己の領域から相手に意見、要求を出していく際にも笑う。挨拶、謝罪などにもこの「笑い」を伴う。これらは一見「仲間づくりの笑い」に似ているが、意図的に「仲間づくりの笑い」に擬して、疑似仲間を作る社会的色彩の強い「笑い」である（早川2001：5）。

² 「コア会話」とは、『BTSJ 日本語自然会話コーパス（2018年版）』の中の会話のジャンル（雑談）、場面（母語場面／接触場面）、話者の社会的属性（学生）、話者同士の面識の度合い（初対面／既知（友人）、話者関係（対同等）、性別（男男／女女／男女）に条件を統制して抽出した155会話である。

3. 研究方法

本研究では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020年版)』を利用して、日中接触場面の雑談における母語話者と非母語話者の笑いを、「総合的会話分析」(宇佐美 2008, 2013, 2015)の方法論に基づいて分析した。

3.1 本研究に用いるデータ

『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020年版)』の中から、以下の選定基準によって、接触場面における初対面会話と友人同士の会話データを選定した。

- ① 接触場面における母語話者と日本語が上級レベルの非母語話者の初対面会話と友人同士の会話における笑いを分析するため、その条件を満たす音声付きの会話であること。
- ② ①の条件を満たす 23 会話の中で、初対面会話と友人同士の会話を同数にするため、会話数の少ないほうの接触場面の「初対面会話 (女性同士)」8 会話に合わせて、友人同士の 15 会話から 8 会話を抽出した³。(非母語話者は、全員中国語 (台湾の国語を含む) を母語とする日本語学習者である。)

選定した全 16 会話⁴は、すべて女性同士による会話である。選定した 16 会話の総会話時間は 5 時間 20 分 48 秒⁵で、総発話文数は 6622 である。

3.2 分析方法

『基本的な文字化の原則 (BTSJ) 2019 年改訂版』(宇佐美, 2020) では、当該話者自身の笑い、相手が発話しているときの笑いを区別して文字化している。そのことを生かし、選定した 16 会話における笑いを、話者自身の「①発話時の笑い」と「②相手発話時の笑い」に分けて、それぞれの頻度と総発話文数に占める割合、及び、笑いの総数に占める割合を算出した。「<笑い>」や「<笑いながら>」などで表示されているものを「①発話時の笑い」とし、相手側の笑いであることを示すカッコ内に記された「(<笑い>)」を「②相手発話時の笑い」とした。「<2人で笑い>」は、当該発話の話者による「①発話時の笑い」と相手話者による「②相手発話時の笑い」の両方としてカウントした。また、1 発話文中に笑いが複数回出現した場合、複数回とカウントした。なお、統計的処理は、SPSS(ver.26)を使用して行った。

宇佐美・張 (2020) では、話者の「①発話時の笑い」を対象に、次頁の早川 (2000a) による笑いの分類に倣い、初対面会話、友人同士の会話別に、母語話者と非母語話者による「①発話時の笑い」のタイプを、大きくは、「A.仲間づくりの笑い」「B.バランスをとるための笑い」「C.覆い隠すための笑い」の 3 つに分類し、さらに下位項目を立てた合計 8 タイプに分けて、コーディングを行った。

³ 15 会話の会話グループをグループ番号の逆順に並べて上から順に選定したものである。

⁴ 初対面 8 会話の通し番号は 279, 280, 281, 282, 283, 284, 285, 286 であり、友人同士 8 会話の通し番号は 142, 143, 144, 324, 325, 326, 327, 328 である。

⁵ 初対面 8 会話の 1 会話あたりの平均時間は 15 分 43 秒であり、友人 8 会話の 1 会話あたりの平均時間は 24 分 23 秒である。

早川 (2000a) による笑いの分類

- A.仲間づくりの笑い：A-1.自分の楽しいと思うことに付加され、談話参加を促す笑い
 A-2.相手の考えを共有し、会話に参加する笑い
 A-3.共通の背景を確認する笑い
 B.バランスをとるための笑い：B-1.自分の領域に属する内容に付加された笑い
 B-2.相手領域に踏み込むことに付加された笑い
 B-3.挨拶に付加された笑い
 C.覆い隠すための笑い：C-1.言いたくないことを隠すための笑い
 C-2.反応の仕方がわからないための笑い

本研究では、「②相手発話時の笑い」も考察対象に含め、母語話者、非母語話者によるすべての笑い 783 例を対象にコーディングを行った。

以下に、コーディングの具体例⁶を示す。

- 例 (1) —1 A 〈笑い〉 (A-1)もうホントにいい先生がいるのよねえ。
 —2 B ふーん
 —3 A それで、もう、うちの子供なんか、恋をしてる程大好きで、「だいしゅき、だいしゅき」とかゆっ 〈笑い〉 (A-1)
 —4 B 〈笑い〉 (A-2)かわいー 〈笑い〉 (A-2)
 例 (2) —1 A でも、わたしなんか、なんか、あの、よくあるじゃないですか。お見合いの時に聞かれる、あれのような心境になって。〈笑い〉 (A-3)
 —2 B 興信所みたいな。〈笑い〉 (A-3)
 例 (3) —1 A Bちゃん、まだ 22 歳だっけ。
 —2 B 来年で 〈笑い〉 (B-1) , 23 で一す。 〈笑い〉 (B-1)
 例 (4) —1 A じゃあ、この、点減ってゆうふうにこー、ファジーな表現がいいんじゃないですか。〈笑いながら〉 (B-2)
 例 (5) —1 A あーそうですか。有り難うございます。〈笑いながら〉 (B-3)
 例 (6) —1 A あるんですよ。いろいろと。
 —2 B はあ
 —3 A 〈笑いながら〉 (C-1)いろいろと・・・
 例 (7) —1 A だからそれがすけてんのよ。
 —2 B 〈笑い〉 (C-2)
 —3 A もう、パンツ見える？

笑いのコーディングの結果の信頼性は、認定者 2 名が 16 会話の中から初対面会話と友人同士の会話 1 会話ずつを選択し、「評定者間信頼性係数 (カッパ係数)」を求めた ($k=.836$)。その後、評定が一致しなかった箇所については、認定者の間で合意を得るまで検討し、結果を定めた。

4. 分析結果

上記のコーディングの後、母語話者、非母語話者のタイプ別の笑いが、それぞれの笑いの総数に占める割合を初対面、友人の場面別に示していく。

⁶ 用例は、早川(2001)の一部を改変したものである。

4.1 母語話者と非母語話者による場面ごとの「①発話時の笑い」の頻度と割合

以下の表 1-1 に、初対面会話，友人同士の会話別に，母語話者と非母語話者の「①発話時の笑い」の頻度とそれが当該話者の総発話文数に占める割合を示す。

表 1-1 母語話者と非母語話者の「①発話時の笑い」と
当該話者の総発話文数に占める割合

話者	初対面(8 会話) : 頻度(割合%)		友人(8 会話) : 頻度(割合%)	
	①発話時の笑い	当該話者の総発話文数	①発話時の笑い	当該話者の総発話文数
母語話者	156(10.83)	1440(100.00)	129(6.63)	1946(100.00)
非母語話者	122(8.19)	1491(100.00)	180(10.32)	1745(100.00)

表 1-2 場面別「①発話時の笑い」の頻度

話者	初対面(8 会話)	友人(8 会話)
母語話者	156***	129***
非母語話者	122***	180***

*** : $p < .001$

表 1-3 話者別「①発話時の笑い」の頻度

場面	母語話者	非母語話者
初対面(8 会話)	156***	122***
友人(8 会話)	129***	180***

*** : $p < .001$

表 1-1 からわかるように，初対面会話においては，母語話者のほうが，非母語話者よりも笑いが多いが，友人同士の会話においては，非母語話者のほうが笑いが多 ($\chi^2(1)=11.525$, $p=.0006866$, $p < .001$) 表 1-2 参照)。また，母語話者は，友人同士の会話よりも初対面会話において笑いが多いが，非母語話者は，初対面会話よりも友人同士の会話における笑いが多 ($\chi^2(1)=11.525$, $p=.0006866$, $p < .001$) 表 1-3 参照) ということがわかる。つまり，初対面と友人の間，および，母語話者と非母語話の間の両方に 0.1%水準で有意差が認められた。

4.2 母語話者と非母語話者による場面ごとの「②相手発話時の笑い」の頻度と割合

次に，初対面会話，友人同士の会話別に，母語話者と非母語話者の「②相手発話時の笑い」の頻度と相手話者の総発話文数に占める割合を表 2 に示す。「②相手発話時の笑い」は，相手のターンの際に，相手の発話と重なった短い小声の笑いであり，相手の発話を聞いていることを示したり，相手の発話を促進する機能の一種の指標とも考えられる。

表 2 母語話者と非母語話者の「②相手発話時の笑い」の頻度と
相手話者の総発話文数に占める割合

話者	初対面(8 会話) : 頻度(割合%)		友人(8 会話) : 頻度(割合%)	
	②相手発話時の笑い	相手話者の総発話文数	②相手発話時の笑い	相手話者の総発話文数
母語話者	50(3.35)	1491(100.00)	44(2.52)	1745(100.00)
非母語話者	53(3.68)	1440(100.00)	49(2.52)	1946(100.00)

表 2 からわかるように，初対面会話でも，友人同士の会話でも，母語話者と非母語話者の「相手が発話している際の笑い」の頻度と割合は，ほぼ同程度である。また，母語話者と非母語話者どちらも，友人との会話よりも，初対面会話のほうに笑いが多傾向を示しているが， χ^2 検定を行ったところ，統計的有意差は認められなかった。

以上のことから，「①発話時の笑い」については，母語話者は，初対面会話のほうに笑い

が多く、非母語話者は、友人と話す際に、笑いが多いということが、明らかになった。この違いについては、次の 4.3 のタイプ別の笑いの結果や、質的分析によって、後に考察する。

「②相手発話時の笑い」については、母語話者、非母語話者ともに、初対面会話に多い傾向は示したものの統計的に有意ではなかった。つまり、相手発話時の笑いという形で、聞き手として会話に貢献する度合いについては、初対面、友人の会話ともに、母語話者、非母語話者の間に、違いがないことを示している。

4.3 母語話者と非母語話者による場面ごとのタイプ別「①発話時の笑い」の頻度と「①発話時の笑い」の総数に占める割合

ここでは、母語話者と非母語話者による「①発話時の笑い」のタイプを、大きくは、3.2 で示した、「A.仲間づくりの笑い」「B.バランスをとるための笑い」「C.覆い隠すための笑い」の 3 つに分類し、さらに下位項目を立てた合計 8 タイプのタイプ別頻度と割合を表 3-1、表 3-2 にまとめる。下位項目である 8 タイプの定義を再掲する。便宜上、表 3-1 と表 3-2 では、下位項目の 8 タイプは、以下の「本研究に用いる「笑い」の分類」に示した冒頭の略称のみ記す。

本研究に用いる「笑い」の分類

A-1.自分：自分の楽しいと思うことに付加され、談話参加を促す笑い
A-2.相手：相手の考えを共有し、会話に参加する笑い
A-3.共通：共通の背景を確認する笑い
B-1.自分：自分の領域に属する内容に付加された笑い
B-2.相手：相手領域に踏み込むことに付加された笑い
B-3.挨拶：挨拶に付加された笑い
C-1.隠し：言いたくないことを隠すための笑い
C-2.戸惑い：反応の仕方がわからないための笑い

表 3-1 初対面 8 会話における母語話者、非母語話者によるタイプ別「①発話時の笑い」の頻度と「①発話時の笑い」の総数に占める割合

話者	A. 仲間づくりの「笑い」： 頻度(割合%)			B. バランスをとるための 「笑い」： 頻度(割合%)			C. 覆い隠すため の「笑い」： 頻度(割合%)		①「発話時 の笑い」の 総数
	A-1 自分	A-2 相手	A-3 共通	B-1 自分	B-2 相手	B-3 挨拶	C-1 隠し	C-2 戸惑い	
母語話者	44 (28.21)	47 (30.13)	4 (2.56)	44* (28.21)	4* (2.56)	9 (5.77)	0 (0.00)	4 (2.56)	156 (100.00)
	95 (60.90)			57 (36.54)			4 (2.56)		
非母語話者	30 (24.69)	39 (31.97)	4 (3.28)	22* (18.03)	8* (6.56)	7 (5.74)	1 (0.82)	11 (9.02)	122 (100.00)
	73 (59.84)			37 (30.33)			12 (9.84)		

* : $p < .05$

表 3-2 友人 8 会話における母語話者, 非母語話者によるタイプ別「①発話時の笑い」の頻度と「①発話時の笑い」の総数に占める割合

話者	A. 仲間づくりの「笑い」: 頻度(割合%)			B. バランスをとるための 「笑い」: 頻度(割合%)			C. 覆い隠すための 「笑い」: 頻度(割合%)		①「発話時 の笑い」の 総数
	A-1 自分	A-2 相手	A-3 共通	B-1 自分	B-2 相手	B-3 挨拶	C-1 隠し	C-2 戸惑い	
母語話者	59 (45.74)	39 (30.23)	9 (6.98)	12 (9.30)	6* (4.65)	3 (2.33)	1 (0.78)	0 (0.00)	129 (100.00)
	107 (82.95)			21* (16.28)			1 (0.78)		
非母語話者	72 (40.00)	40 (22.22)	8 (4.44)	32 (17.78)	25* (13.89)	2 (1.11)	0 (0.00)	1 (0.56)	180 (100.00)
	120 (66.67)			59* (32.78)			1 (0.56)		

* : $p < .05$

表 3-1 と表 3-2 からわかるように, 初対面会話でも, 友人同士の会話でも, 母語話者と非母語話者ともに, 「①発話時の笑い」のタイプは, 「A.仲間づくりの笑い」, 「B.バランスをとるための笑い」, 「C.覆い隠すための笑い」の順に多かった。また, 雑談においては, 場を和ませる「仲間づくりのための笑い」によって, ポジティブ・ポライトネスが表されていることがわかる。

次に, 異文化間で違いが出やすいと予想した「B.バランスをとるための笑い」に注目するが, 「B-1.自分」, 「B-2.相手」, 「B-3.挨拶」のうち, 「B-3.挨拶」が少なかったため, 主に意味が相反する「B-1.自分」と「B-2.相手」に焦点を当てる。表 3-1 からわかるように, 初対面会話においては, 母語話者のほうが, 非母語話者よりも「自分の領域に属する内容」に言及する際の笑いが多く, 非母語話者のほうは, 母語話者よりも「相手領域に踏み込む際」の笑いが多く ((フィッシャーの正確確率検定, $p = .04997, p < .05$) 表 3-1 の網掛け部分参照)。一方, 表 3-2 からは, 友人同士の会話においては, 非母語話者のほうが, 母語話者よりも「バランスをとるための笑い」が多く (($t = -2.944, df = 14, p = .011, p < .05$) 表 3-2 の網掛け部分参照), その中でも, 「相手領域に踏み込む際」の笑いが多く (($t = -2.326, df = 14, p = .036, p < .05$) 表 3-2 の網掛け部分参照) ことが明らかになった。上記のことから, 非母語話者は, 初対面の会話においても, 友人同士の会話においても, 母語話者よりも「相手領域に踏み込むことに付加された笑い」が多いことがわかる。

また, 母語話者は, 友人同士の会話よりも初対面会話において「バランスをとるための笑い」が多いが, 非母語話者は, 初対面会話よりも友人同士の会話において「バランスをとるための笑い」が多いことがわかる (($\chi^2(1) = 19.297, p = .00001119, p < .001$) 表 3-3 参照)。母語話者が, 親しい間柄に対しては「仲間づくりの笑い」が多く, 「バランスをとるための笑い」が少ないことが, 早川 (2001) で報告されているが, 本研究でも同様の結果が得られた。それに対して, 非母語話者は, 親しい間柄との会話において「バランスをとるための笑い」が多いという結果は興味深い。

表 3-3 場面別 B タイプの「①発話時の笑い」の頻度

話者	B. バランスをとるための「笑い」	
	初対面	友人
母語話者	57***	21***
非母語話者	37***	59***

*** : $p < .001$

表 3-4 場面別 B-1 タイプの「①発話時の笑い」の頻度

話者	B-1 自分	
	初対面	友人
母語話者	44***	12***
非母語話者	22***	32***

*** : $p < .001$

一方、母語話者は、初対面会話においてのほうが「自分の領域に属する内容」に言及する際の笑いが多く、非母語話者は、友人同士の会話においてのほうが「自分の領域に属する内容」に言及する際の笑いが多く ($\chi^2(1)=14.855, p=.0001161, p<.001$) 表 3-4 参照)。

以上のことから、母語話者は、初対面会話のほうで「自分の領域に属する内容」に言及する際、笑いが共起することが多いが、非母語話者は、初対面・友人同士いずれの場面においても、「相手領域に踏み込む際」に「バランスをとるための笑い」を共起させてポジティブ・ボライトネスを表していることなどが明らかになった。

4.4 母語話者と非母語話者による場面ごとのタイプ別「②相手発話時の笑い」の頻度と「②相手発話時の笑い」の総数に占める割合

最後に、表 4-1、表 4-2 に、初対面会話、友人同士の会話別に、母語話者と非母語話者による「②相手発話時の笑い」のタイプ別頻度と割合をまとめる。表 3-1 と表 3-2 と同様に、下位項目は略称を用いて示す。

表 4-1 初対面 8 会話における母語話者、非母語話者によるタイプ別「②相手発話時の笑い」の頻度と「②相手発話時の笑い」の総数に占める割合

話者	A. 仲間づくりの「笑い」: 頻度(割合%)			B. バランスをとるための「笑い」: 頻度(割合%)			C. 覆い隠すための「笑い」: 頻度(割合%)		「②相手発話時の笑い」の総数
	A-1 自分	A-2 相手	A-3 共通	B-1 自分	B-2 相手	B-3 挨拶	C-1 隠し	C-2 戸惑い	
母語話者	0 (0.00)	46 (92.00)	1 (2.00)	2 (4.00)	1 (2.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	50 (100.00)
	47 (94.00)			3 (6.00)			0 (0.00)		
非母語話者	0 (0.00)	49 (92.45)	2 (3.77)	1 (1.89)	0 (0.00)	1 (1.89)	0 (0.00)	0 (0.00)	53 (100.00)
	51 (96.23)			2 (3.77)			0 (0.00)		

表 4-2 友人 8 会話における母語話者, 非母語話者によるタイプ別
「②相手発話時の笑い」の頻度と「②相手発話時の笑い」の総数に占める割合

話者	A. 仲間づくりの「笑い」: 頻度(割合%)			B. バランスをとるための 「笑い」: 頻度(割合%)			C. 覆い隠すため の「笑い」: 頻度(割合%)		「②相手発話時の笑い」の総数
	A-1 自分	A-2 相手	A-3 共通	B-1 自分	B-2 相手	B-3 挨拶	C-1 隠し	C-2 戸惑い	
母語話者	0 (0.00)	39 (88.64)	2 (4.55)	0 (0.00)	1 (2.27)	2 (4.55)	0 (0.00)	0 (0.00)	44 (100.00)
	41 (93.18)			3 (6.82)			0 (0.00)		
非母語話者	0 (0.00)	48 (97.96)	1 (2.04)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	49 (100.00)
	49 (100.00)			0 (0.00)			0 (0.00)		

表 4-1 と表 4-2 からわかるように, どちらの場面においても, 「②相手発話時の笑い」は「相手の考えを共有し, 会話に参加する」笑いが主であり, 「①発話時の笑い」とは異なり, 母語話者と非母語話者の間で違いは見られなかった。この相手の発話に貢献する「仲間づくりのための笑い」は, ポジティブ・ポライトネスの現れである。母語話者も非母語話者も, 相手が発話している際の笑いが同程度であるということは, 話し手と聞き手双方が協働して構築していく会話という相互作用に, 聞き手として貢献する度合いは, 母語話者, 非母語話者に違いがないことを示しており, 興味深い。

5. 「B. バランスをとるための笑い」の機能についての分析

4 節の分析結果により, 「①発話時の笑い」における「B. バランスをとるための笑い」については, 母語話者と非母語話者の間で違いがあることがわかった。本節では, この「バランスをとるための笑い」, その中でも母語話者と非母語話者の間に有意差が認められた「B-1. 自分の領域に属する内容に付加された笑い」と「B-2. 相手領域に踏み込むことに付加された笑い」に焦点を絞って, 具体的な会話例を見ながら考察していく。

その前に, 以下の表 5 に, 会話例に使用されている文字化方法である『基本的な文字化の原則 (BTSJ) 2019 年改訂版』(宇佐美, 2020) の記号凡例を示しておく。

表 5 本研究に用いられる会話例における BTSJ の記号凡例

。	[全角] 1 発話文の終わりにつける。
*	発話文が終了するごとに, 「*」を「発話文終了」セルに記入する。つまり, 発話文番号と発話内容中の句点「。」と「*」の数は必ず一致する。このように, 「発話文終了」と「発話内容」と 2 つのセルで二重に確認する。
?	疑問文につける。疑問の終助詞がついた質問形式になっていなくても, 語尾を上げるなどして, 疑問の機能を持つ発話には, その部分が文末(発話文末)なら「?。」をつける。倒置疑問の機能を持つものには, 発話中に「?,」をつける。
< >{< < >{>	同時発話されたものは, 重なった部分双方を<>でくくり, 重ねられた発話には, <>の後に, {<}をつけ, そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ 2 つ「,,」をつける。また重ねた方の発話には, <>の後に, {>}をつける。
[]	文脈情報。その発話がなされた状況ができるだけ思いおこしやすくなるように, 研究者の覚

	え書きとして、音声上の特徴（アクセント、声の高さ、大小、速さ等）のうち、特記の必要があるものなどを[]に入れて記しておく。
()	短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、()にくくって入れる。
< >	笑いながら発話したものや笑い等は、< >の中に、<笑いながら>、<2人で笑い>などのように説明を記す。笑いが比較的是っきりと聞こえる場合は、「はははは<笑い>」のように記す。笑い自体が何かの返答になっているような場合は1発話文となるが、基本的には、笑いを含む発話中か、その発話文の最後に記し、その後句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。
(< >)	相手の発話の途中で、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、(<笑い>)とする。
#	聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される拍数に応じて、#マークをつける。
「 」	[全角]トランスクリプトを公開する際、固有名詞等、被験者のプライバシーの保護のために明記できない単語を表すときに用いる。

5.1 「B-1. 自分の領域に属する内容に付加された笑い」についての分析

この「B-1.自分の領域に属する内容に付加された笑い」は、初対面場面では、主に専門や語学の勉強について自己開示する際や、相手に褒められた際に謙遜したり自嘲したりするような文脈において出現し、友人同士の会話では、就活の失敗談・デート・結婚など、よりプライベートな話をする際に伴われていた。4節の結果に示したように、初対面会話においては、母語話者が非母語話者よりも有意に多かった（(フィッシャーの正確確率検定, $p=0.04997, p<.05$) 表 3-1 の網掛け部分参照）。以下、母語話者による初対面会話における B-1 タイプの笑いの例を示す。

会話例 1：母語話者による「B-1.自分の領域に属する内容に付加された笑い」の例（初対面の会話）

会話の通し番号	会話グループ番号	ライン番号	発話文番号	発話文継続	話者記号	発話内容
280	20	35	34	*	TFA012	え、なに、将来は、スペイン？。
280	20	36	35	*	JF136	あー、最初はそう思ってたけどー(うん)、うーん、ちょっと難しいかなーと思って<笑い>。
280	20	37	36	*	TFA012	えーなんでスペイン語、スペイン語、好き？。
280	20	38	37	*	JF136	うん、好きです。
280	20	39	38	*	TFA012	ふーん。
280	20	40	39	*	JF136	あー私が昔1ヶ月ちょっと、アメリカにホームステイしたんですけど(ふーん)、その時の、ホストマザーが、あのースパニッシュだったんでー、(あー)それの、それをきっかけにしてー、(うん)なんとなく面白そうだなっていう感じ。
280	20	41	40	*	TFA012	ふーん、##、英語？。
280	20	42	41	*	JF136	英語ーは、昔は一生懸命やってたけどー(うん)、大学入ってから全然やってなくて<笑い>、結局しゃべれない。
280	20	43	42	*	TFA012	そう。
280	20	44	43	*	JF136	うん。
280	20	45	44	*	TFA012	じゃ今、スペイン語はうまいでしょ？。
280	20	46	45	*	JF136	ううん<笑い>、そうでもない。

280	20	47	46	*	JF136	普通に授業でやってー、(ふーん)で、アルゼンチンに1ヵ月ホームステイしてー、(んー)その時にちょっとだけ上達したんだけどー、また日本に帰ってきたら、戻っちゃった<軽い笑い>。
280	20	48	47	*	TFA012	あーそうですか、ふーん[ささやくように]。

母語話者 JF136 が相手の非母語話者 TFA012 に将来スペインに行くかどうかについて聞かれて、発話文 35 で、「難しいかな」と照れ笑いをしながら返答している。その後、英語について聞かれた時に、発話文 41 で、照れ笑いをしながら「全然やっていない」と返答している。次に「スペイン語はうまいでしょ」と褒められた時に、発話文 45 で、照れ笑いをしながら「ううん」と否定し、発話文 46 でも、照れ笑いをしながらその理由について述べている。会話例 1 のように、初対面会話においては、親しくない相手の前で、自分のことについて過小に評価することがしばしば行われる。こうした笑いは、笹川 (2008) によれば、初対面の日中・日米会話においては、日本人のほうが、中国人とアメリカ人よりも多く用いていたことが報告されているが、本研究でもそれが示された。

以上のことから、母語話者は、初対面会話においては、積極的に相手の領域に踏み込む発話よりも、恥や照れを表す笑いを伴いながら自己開示を行う傾向が明らかになった。これは、母語話者が、非母語話者よりも自己開示の際に気を遣っているということを示している。日本語教育においては、日本語学習者にこのような文化的特徴について説明する必要があるだろう。

5.2 「B-2. 相手領域に踏み込むことに付加された笑い」についての分析

相手の領域に踏み込む際に使用される B-2 タイプの笑いは、相手の領域に踏み込むことによる FTA を軽減する効果がある。4 節の分析結果から、初対面会話においても友人同士の会話においても、非母語話者のほうが母語話者よりも相手の領域に踏み込む際に使用される B-2 タイプの笑いが有意に多い (初対面会話: フィッシャーの正確確率検定, $p=0.04997$, $p<0.05$ (表 3-1 の網掛け部分参照), 友人同士の会話: $t=-2.326$, $df=14$, $p=0.036$, $p<0.05$ (表 3-2 の網掛け部分参照)) ということがわかった。これは、非母語話者のほうが、そもそも相手の領域に踏み込む発話が多いということが考えられる。非母語話者による「B-2. 相手領域に踏み込むことに付加された笑い」の例を、初対面場面 (5.2.1), 友人場面 (5.2.2) の順に示す。

5.2.1 初対面会話における「B-2. 相手領域に踏み込むことに付加された笑い」の用例

まず、初対面会話における非母語話者の「B-2. 相手領域に踏み込むことに付加された笑い」の例を、以下に示す。

会話例 2: 非母語話者による「B-2. 相手領域に踏み込むことに付加された笑い」の例 (初対面の会話)

会話の通し番号	会話グループ番号	ライン番号	発話文番号	発話文継続	話者記号	発話内容
286	20	275	271	*	JF138	それも北京にある?。
286	20	276	272	*	CFA005	北京にある、うん。
286	20	277	273	*	JF138	へえー。

286	20	278	274	*	JF138	えー知らなかった。
286	20	279	275	*	CFA005	えっ[驚いたように]?。
286	20	280	276	*	JF138	うん。
286	20	281	277	*	CFA005	説明し、説明、私が説明しているのが間違えているかもしれない。
286	20	282	278	*	JF138	ううん、でも、全然知らないから。
286	20	283	279	*	CFA005	知らないの<笑い>?。
286	20	284	280	*	CFA005	清華の方が有名ですよ<軽い笑い>。
286	20	285	281	*	JF138	そうなんだ(んー)。

非母語話者 CFA005 が、相手の母語話者 JF138 に北京にある有名な大学について話している。母語話者 JF138 に発話文 278 で「知らない」と言われ、発話文 279 と 280 で、笑いながら相手の領域に踏み込んで、相手の無知さについて言及するという FTA (フェイス侵害行為) を行っている。初対面の相手であるにもかかわらず、このような相手のフェイスを侵害する一種の「からかい」の発言をしているが、そこには、FTA 軽減行為として、笑いが伴われていることがわかる。一方で、母語話者では、初対面会話における「B-2.相手領域に踏み込むことに付加された笑い」は、会話例 3 のように、相手を持ち上げる際に使われることがほとんどであった。

会話例 3：母語話者による「B-2.相手領域に踏み込むことに付加された笑い」の例（初対面の会話）

会話の通し番号	会話グループ番号	ライン番号	発話文番号	発話文継続	話者記号	発話内容
282	20	223	220	*	JF135	えじゃあお母さんはもう日本語ベラベラ?。
282	20	224	221	*	TFA012	うん、そう。
282	20	225	222	*	JF135	うまい?。
282	20	226	223	*	TFA012	うん。
282	20	227	224	*	JF135	でも、あなたもうまいもんね。
282	20	228	225	*	TFA012	まだまだです。
282	20	229	226	*	JF135	<笑い>謙遜の仕方まで、こう、日本チックな。

非母語話者 TFA012 が相手の母語話者 JF135 に日本語能力について褒められて、発話文 225 で「まだまだです」と謙遜しているが、母語話者は次の発話文で笑いながら相手の非母語話者が謙遜の仕方まで日本人らしいと再度称賛している。

5.2.2 友人同士の会話における「B-2.相手領域に踏み込むことに付加された笑い」の用例

次に、友人同士の会話における非母語話者による「B-2.相手領域に踏み込むことに付加された笑い」の例を示す。

会話例 4：非母語話者による「B-2.相手領域に踏み込むことに付加された笑い」の例（友人同士の会話）

会話の通し番号	会話グループ番号	ライン番号	発話文番号	発話文継続	話者記号	発話内容
325	22	597	577	*	CFA007	でも「JF177 苗字」さんも、英語のほうは<すごうまいでしょう>{<}

325	22	598	578	*	JF177	<え、もう全然できない、できない>{>}できない。
325	22	599	579	*	CFA007	謙虚しちゃだめだよ<笑い>。
325	22	600	580	*	JF177	違う、本当にできない、勉強しないと大変、大変。

母語話者 JF177 が、非母語話者 CFA007 の英語力に関する質問に対して、発話文 578 で「できない」と謙虚に返答している。それに対して、非母語話者 CFA007 が発話文 579 で、相手の母語話者 JF177 の領域に立ち入る形で、「謙遜しちゃだめだよ」と促している。相手と打ち解けた関係にあるからこそ、このような「相手領域に踏み込む」発話が多いと考えられる。ただし、そこには、笑いが共起しているのである。

このように、非母語話者（ここでは、中国語母語話者）は、「相手領域に踏み込む」発話が、母語話者に比べて有意に多いが、そこには、笑いが共起し、ポジティブ・ポライトネスを表している。この類の笑いは、相手とより仲良くしたいという意図の現れだと考えられる。ただ、「相手領域に踏み込む」発話の過剰使用は、特に初対面会話においては、場合によっては、相手の誤解を招いてしまう危険性もある。また、母語話者は、あまり行っていないという傾向にあった。そのため、この点に関しては、非母語話者に対して注意を促す必要があるだろう。一方で、異文化間コミュニケーションの観点からは、母語話者にも、このような異なる文化背景を持つ非母語話者の「会話スタイル」を知ってもらうことが重要であろう。

6. おわりに

本研究では、日中接触場面の雑談における母語話者・非母語話者による笑いの使用傾向を定量的分析で明らかにした上で、「バランスをとるための笑い」が、初対面会話と友人同士の会話で、それぞれどのように使われているのかを考察した。その結果、①「バランスをとるための笑い」は、初対面会話では、母語話者のほうが多く、友人同士の会話では、非母語話者のほうが多い。②母語話者は、友人との会話より初対面会話において、「バランスをとるための笑い」が多いが、非母語話者は、友人との会話のほうに多い。③母語話者は、初対面会話において「自分の領域に属する内容」に言及する際、照れ笑いのような笑いが共起することが多いのに対して、非母語話者は、初対面・友人同士いずれの場面においても、「相手領域に踏み込む際」に FTA を軽減する「バランスをとるための笑い」を共起させて、ポジティブ・ポライトネスを表していることなどが明らかになった。本研究の結果、日本語母語話者の笑いとは非母語話者の笑いの生起箇所やその機能には大きな違いがあることが明らかになった。今後、日本語教育や異文化間コミュニケーション教育に生かすべき示唆が得られたと言えよう。

今後は、女性同士の雑談会話に見られる笑いにとどまらず、性差や上下関係なども考慮に入れて、異文化間コミュニケーションにおける笑いの実態を探っていきたい。

謝 辞

本研究は、国立国語研究所「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブ・プロジェクト（リーダー：宇佐美まゆみ）、および JSPS 科研費 18H03581「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的な研究」（研究代表者：宇佐美まゆみ）の成果の一部である。

また、統計処理に際しては、国立国語研究所の山崎誠氏に協力を得た。心より感謝申し上げます。

引用文献

- 池田智子(2003). 「日本語対面状況における笑いの構造と機能」『社会言語科学』, 6:1, pp.52-60.
- 宇佐美まゆみ(2008). 「相互作用と学習ーディスコース・ポライトネス理論の観点からー」西原鈴子・西郡仁朗(編)『講座社会言語科学 第4巻 教育・学習』, pp.150-181, ひつじ書房.
- 宇佐美まゆみ(2013). 「会話データの作成・分析ー『総合的会話分析』と『基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)』」『日本語学』, 32:14, pp.132-147.
- 宇佐美まゆみ(2015). 「『総合的会話分析』の趣旨と方法ー量的分析と質的分析の必然的融合ー」特集「日本語教育の研究手法ー『会話・談話の分析』という切り口からー」『日本語教育』, 162:0, pp.34-49.
- 宇佐美まゆみ(2020). 「『基本的な文字化の原則 (BTSJ) 2019年改訂版』」宇佐美まゆみ(編)『自然会話分析への語用論的アプローチ』, pp.17-42, ひつじ書房.
- 宇佐美まゆみ・張未未(2020). 「雑談における母語話者と非母語話者の笑いの使用傾向の分析ー『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018年版』を用いてー」『日本語学会 2020年度春季大会予稿集』, pp.245-250.
- 大津友美(2014). 「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス:『遊び』としての対立行動に注目して」『社会言語科学』, 6:2, pp.44-53.
- 笹川洋子(2008). 「異文化コミュニケーションに現れる笑いのモダリティ調節について」『神戸親和女子大学言語文化研』, 2, pp.29-52.
- 難波彩子(2017). 「会話の共創で起こる笑いの一考察ーリスナーシップ行動を中心にー」『日本語学』, 36:4, pp.164-176.
- 早川治子(1995). 「日本人の『笑い』の談話機能」『言語と文化』, 7, pp.99-110
- 早川治子(1997). 「日本人の『笑い』の談話機能ー2ー:出現率と場面」『言語と文化』, 9, pp.97-109.
- 早川治子(2000a). 「相互行為としての『笑い』ー自・他の領域に注目してー」『文学部紀要』, 14(1), pp.23-43.
- 早川治子(2000b). 「自然言語データにおける『笑い』の数量的基礎分析」『言語と文化』, 12, pp.38-64.
- 早川治子(2001). 「『笑い』の分類に基づく数量的分析」『文学部紀要』, 14:2, pp.1-24.
- 文瑞蘭(2002). 「日本語母語話者の初対面会話における笑いについてー『配慮』につながるポライトネス・ストラテジーとしての笑いを中心にー」『日本語学研究』, 5, pp.33-51.
- 三宅和子(2011). 「談話中の『笑い』と話者の内的フットィング:スクリプトにない『笑い』の出現を手がかりに」『文学論藻』, 85, pp.134-116.
- 村田和代・堀素子(2007). 「異文化間コミュニケーションにおける『笑い』の機能について」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』, 9, pp.115-124.

関連 URL

- 『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2020年版』
https://ninjal-usamilab.info/lab/btsj_corpus/
 「基本的な文字化の原則 (BTSJ : Basic Transcription System for Japanese)」
https://ninjal-usamilab.info/lab/about_btsj/background/